

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
令和六年一月一日発行(第百二十七卷第一号)

ホトトギス

一月号



句日記

廣太郎

令和四年一月五日 焦心会

瑕瑣なき空寒禽の自在かな
 在りし日の旅の佛水仙花
 糸しき鳥語閉ぢ込め冬木立
 丑の星歳し寒天透き通る
 雪吊に雪無き街の引き締まる
 待春の長さき曳ける船の水尾
 言の葉の躍り出したる初句会
 魁めく藪巻動き出しさうな
 一月七日 芦屋ホトギス会
 寒の内 水音固まる 邸の庭
 樑の落ちて未来を引き寄せる
 初旅にをしどり夫婦集ふ句座
 煮凝や女将の愚痴も肴とし
 一月八日 野分会芦屋例会
 苔天を裏返したる冬桜
 冬桜城の盛衰見届けて
 火を入れてより左義長の神さびる
 冬桜製にも晴にも二三輪
 一月八日 青風会芦屋例会
 寒稽古声高らかに豆剣十
 淑氣満つ庭に俯重ねつつ
 寒稽古竹月一本折りもして
 葉流さんの夫婦の絆てふ淑氣
 一月九日 朝日カルチャー若草句会
 松過の水音変りし川の黙
 敬寒の街へベル影倒れ込む
 スケートや転ぶことより先づ覚え
 主亡き書齋嚴寒司る
 敬寒や街騒凜と透き通る
 松過や老若男女動き初む
 スケートに明け渡したる湖の精
 一月十日 大阪倶楽部

水仙に海岸線の日覚めゆく
 一歩入るより底冷の生家かな
 灯台と色を分かちて水仙花
 白煮椀の香紋の故郷雑煮椀
 雑煮椀金の家紋の走り出す
 百年の家風繕ぎゆく雑煮かな
 水仙の一花に床の改る
 一月十二日 上華会
 寒灯下シテ表情百態に
 主亡き家掃初の音に明け
 一陣の鴨より一羽刺がれゆく
 掃初の箒に宿る屋敷神
 寒灯の祈りの声に潤いぬ
 若菜摘む少女の指といふ気品
 腕の若菜香りて祝ぎ心
 一月十五日 一河内野二新年を寿ぐ会
 日脚伸ぶ一周忌とは瞬く間
 江戸の兩発ちて浪迷の冬日和
 初句会 閑西舟の君の艶
 寒灯下寿ぐ会といふ雅
 一月十六日 北國文芸選者吟
 艶やかな指に若菜の摘まれゆく
 一月十七日 さくらさき会
 初旅や車押しに富嶽凜と眠め
 瑕瑣なき空押し上げて寒牡丹
 初旅や形見をそつと懐に
 寒牡丹咲かせ主は旅立ちへ
 一月十九日 前議員句会
 主亡き東洋淋しめず嫁が君
 初明り家津湾を広げゆく
 官邸の木々冬天を突き刺せり
 寒鴉声透き通る昼下り
 寒灯下微笑み絶えぬ遺影かな
 一月十九日 登高会
 故郷も今年限りと屠蘇を酌む
 初富士を車窓に嵌めて賀の旅へ

雲脱いでぬいで初富士現れる
 初富士や都心に多き富士見坂
 屠蘇を酌む地球の未来信じつつ
 一月十日 密邦会
 一輪に探梅行の昂れる
 白銀の六甲指呼に初景色
 探梅の叶ふ蕉庵五六輪
 一月二十二日 青風会東京例会
 初句会 偲ぶ心を持ち寄りて
 悴むや見馴れたる景変わりゆく
 万両や見る人も無く色付いて
 この庭も今年限りや寒雀
 一月二十二日 野分会東京例会ハイブリッド句会
 蒼天を舐めどんと火立ち上る
 一月二十三日 有恒句会選者吟
 破魔矢てふ重たき未来受けにけり
 天帝の威に万両の磨かれし
 弓道部たりし妻受く破魔矢かな
 弓道部として高きに咲ける冬桜
 日輪を舞としたる冬桜
 一月二十四日 若水句会
 白銀の大地にほつと梅早し
 寒卵こつと朝餉の音色かな
 早梅からの日輪淡く微笑める
 命から命へ繋ぐ寒卵
 凍蝶の果つる修道院の庭
 鱗粉に凍蝶魂を納めゆく
 一月二十五日 日黒学園句会
 敬寒の予報に句座の改る
 寒椿雨に日輪弾かれて
 敬寒に列島時間止めてをり
 飾取るより一年の走り出す
 一月三十日 梅花祭選者吟
 一輪の早梅魂を鎮めゆく
 二月二十日 カトリック新聞選者吟
 冬帝に色奪はれてゆく故郷

ホトトギス 令和六年一月一日発行(第百二十七巻第一号)

一月号

定価

壹千九百円

本体壹千七百二十七円

(送料別)

風雅の小筥〔七十二〕

廣太郎

内トホトギス社は丸ビル、東銀ビル、三菱ビルと、東京都千代田区の丸の内というオフィス街に事務所を借りていた。その取り決めのありと、それが誰がしてのたか。社に入社して暫くしてオ―ナ―会の必要ありとも判らないが、私が勧められた。それは「乙種防火管理者」といふ、ある資格を取る人任命されるものである。その編集松尾富氏にこの資格を渡され、書いてあるままに申し込む。その記憶がある。その一室で、講習を受ける講習の手続きをして、この講習を受けた。災害に対する色々な対策、講師が色々講義して下さり、結構有意義な一日であった。学生時代以来の試験に戸惑いながら、防火管理者の資格取得の事が出来た。送り来て、ホトギス社の消防署を訪れ、この資格の任命の手続きをした。ほとんど離れていなければ、消防員の女性が、この資格の任命の手続きをした。担

「ホトギス」ってあの国語の教科書に出てくるあれですか」なんて言われた事が懐かしい。

稲畑汀子俳句集成読書会

—わたしの汀子俳句—

第三回 テーマ「色」

ホスト 星野 椿 (玉藻名誉主宰)

星野 高士 (玉藻主宰)

ゲスト 天野 小石 (天為)

松尾 清隆 (松の花)

山田 真砂年 (稲主宰)

伊東 法子 (ホトトギス)

廣太郎 みなさまこんにちは、ホトトギス主宰の稲畑廣太郎でございます。本日は前ホトトギス名誉主宰で、わたくしの母でもございます、稲畑汀子の俳句集成読書会へお越しくださいませ誠にありがとうございます。今回、こちらの読書会は第三回目となりまして、鎌倉の虚子立子記念館より配信致しております。私も初めて参りまして、素晴らしいところでございます。ホストは、前回二回は私でございましたけれども、今回は私ではございませんで、汀子とも関わりの深い星野椿さんと、先日日本伝統俳句協会で行われました第一回の稲畑汀子賞を受けられました星野高士さんにホストを務めていただきます。よろしくお願ひ申し上げます。どうぞお楽しみに、最後までお付き合いくださいます。

この読書会は、元本となります「稲畑汀子俳句集成」刊行元の朔出版と、そして野分会というホトトギス誌友の句会が企画・運営を行っております。第四回、第五回も準備しておりますので、どうぞ末永くよろしくお願ひ申し上げます。ちなみに次回の開催は九月十八日と決まっておりますので、ご了承くださいませ。それでは、椿さん、高士さん、どうぞよろしくお願ひ致します。

高士 こんにちは、玉藻主宰の星野高士です。いま廣太郎さんから過分な紹介をいただきました。なんか身内でやっているという感じもありますけれど、今日も楽しいメンバーが集まっています。こないだ僕は第一回稲畑汀子賞の際のご挨拶でも、人間としての稲畑汀子、俳人としての稲畑汀子、きっちり使い分けていた人だとリスペクトを込めてお話しさせていただいたんですけれど、今日は選句も持ち寄っていたので、人間としての稲畑汀子、俳人としての稲畑汀子、その辺を深く追求していければな

雑詠 廣太郎選

有りたけの水押し広げ水中花 高知 橋田憲明
 流灯の水のこころに従へる 同
 露乾く間のががやきをあげし草 同
 円覚寺端山の小さき墓洗ふ 横浜 岩本桂子
 代参の施餓鬼詣でに礼言はな 同
 さわやかや看護にたよる風呂上り 同
 影までも灼ける八月十五日 神戸 藤井啓子
 秋立ちぬこころの小窓そつと開け 同
 朝顔を育て一年生育つ 同
 暮れてなほくれなる強し蔓珠沙華 同 池田雅かず
 大花野神の絵筆に咲き揃ふ 同
 くたびれてちやうど良き風秋扇 同
 新涼やまだかほもたぬこけしたち 同 和田華凜
 澄む水に祈りのこころ人にまた 同
 秋草や絵の具に足せる風の色 同 岩岡中正
 炎天を行きゴルゴタを行くごとし 同
 朝顔の海のごとくに咲きにけり 同
 流燈会星をのこしてをはりけり 同

半生をあづま暮しや盆の月 東京 田丸千種
 病む人へけふも文米る虫の秋 同
 俳人の歩幅だらだら祭かな 同
 避暑してつもりになれば入院も 相模原 木村享史
 竹夫人忘れ入院長びける 同
 畳まれて待つ甚平に退院す 同
 バンガロー野太き声の管理人 淡川 木暮陶旬郎
 風よりも軽く生まれて銀やんま 同
 夏霞着し浅間のあるあたり 同
 人声のかたまつてゐる冬日向 東京 今井肖子
 雪吊の縄のゆるびを抜ける風 同
 日めくりのひらひら年を惜みけり 同
 富士山の白さを貰ひ春の雲 静岡 須藤常史
 熟成のワイン八十八夜かな 同
 魚島の消えては現れて進み来る 同
 偲ぶる妻の笑顔と端居かな 長岡 安原 葉
 山風の出はじめてきし夕端居 同
 記念樹の木陰三代句碑涼し 同
 桐一葉小諸に虚子の散歩道 神戸 山田佳乃
 海の日の遠き国より届く文 同
 夕星や門火を細く細く焚く 同
 新秋を箎に盛り分け青物屋 大阪 酒井湧水
 星の声さへも聞こゆる夜の花野 同
 がちやがちやのがちやがちやと叫ぶ愛 同

雑詠句評（十二月号より）

しげ人・しぐれ・公次
紀元・雅・千種
紀子・佳乃・純也
さい雪・廣太郎

緊迫の皐月の海へ護衛艦 太宰府 持永真理子

皐月浪が立ちはだかる荒れた海を見ると身の引き締まる思いがする。その「皐月の海」に護衛艦が突き進んでいったのである。「護衛艦」の出現は国と国との衝突にもなりかねないことを意味している。まさに、一刻を争う「緊迫」の状態である。

一気に詠み下ろした力強さが、緊迫の肌感覚となり、波音やサイレン、艦内の空気感などなど、映画の一場面のような想像を読み手に与えてくれる。

調べと句意が相乗効果をもたらしている一句と思う。

（しげ人）

日本の海上自衛隊は、海に囲まれた島国である日本国を護る為に日夜働いているのである。直接有事という事では無くても世界では緊迫している国もある。六月の海へ出航する護衛艦の勇まし

い姿が見て取れる。（廣太郎）

さそり座の尻尾まで現れきし夜涼 西宮 本郷桂子

「さそり座」は天秤座の東、射手座の西に位置し、盛夏の夕刻に地平近くに現れる。今年の炎暑は凄まじいものであった。夜の帳が降りてさそり座が尻尾まではっきりと見えて来る頃、やつと夜風が涼しく感じられるようになったのだろう。「さそり座の尻尾」と「夜涼」が上手く響き合っている。（しぐれ）

夜空の星の綺麗な場所というのは日本にも何か所かあるが、例えば七月にホトトギス大会が行われる三瓶山もその一つである。満天の星の中、さそり座がその全体の姿を見せ始めた。夏の代表的な星座の偉容を堪能しているのである。（廣太郎）

ヘネシーもオールドパーも梅酒瓶 東京 田丸千種

ヘネシーはフランスのブランデーで、オールドパーはイギリスのウイスキー。どちらも形のよい瓶があるので、それに梅酒を入れて楽しんでおられるのだろう。この句の持ち味は、物だけを提示して、あとは読者の読みにまかせて楽しんでもらおう、ということにあるだろう。まさか梅酒がブランデーやウイスキーに化けるとは思われないけれど。（公次）

自家製の梅酒が出来上ると、それを入れる容器を探さなければならぬ。手頃な物といえば、やはり同じく酒の瓶であるが、洋酒好きの家に高級コニャックとスコッチの瓶に入れたのであ